

作況ニュース（第5号）

水 稲
大 豆

（発行：令和7年7月9日）（編集：令和7年7月7日）

発行：秋田県農林水産部

水 稲

幼形期を確認し、確実に生育・栄養診断を！

- － 草丈長く、茎数少ない、幼形期はやや早まる予想 －
- － 葉 い も ち の 発 生 に 注 意 －

1 今後の気象の見通し

（1）東北地方1か月予報（7月5日～8月4日）【令和7年7月3日 仙台管区气象台発表】

<予想される向こう1か月の天候>

期間の前半は、気温がかなり高い状態が続く見込みです。平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率80%です。降水量は、少ない確率50%です。日照時間は多い確率60%です。

週別の気温は、1週目（7月5日～11日）は、高い確率80%です。2週目（7月12日～18日）は、高い確率80%です。3～4週目（7月19日～8月1日）は、高い確率60%です。

次回の予報発表予定： 1か月予報 毎週木曜日14時30分
3か月予報 7月22日（火）14時

【季節予報】

<https://www.jma-net.go.jp/sendai/data/tenkou/forecast/forecast.html>

【2週間気温予報 毎日随時更新】

<https://www.data.jma.go.jp/cpd/twoweek/?fuk=32>

2 県内の概況

（1）気象経過

【秋田地方气象台】

6月下旬： この期間、低気圧や前線、気圧の谷の影響により曇りや雨の日が多く、22日、26日、27日は大雨の所もあったが、期間のはじめと終わりは高気圧に覆われて晴れた日もあった。

旬平均気温は高く、全地点でかなり高かった。旬降水量は概ね平年並または多い。旬間日照時間は少ないまたは平年並。

[旬統計値（秋田）]

	気温 (℃)	平年差 (℃)	階級区分	降水量 (mm)	平年比 (%)	階級区分	日照時間 (h)	平年比 (%)	階級区分
6月下旬	24.0	+3.3	かなり高い	44.5	77	平年並	35.0	66	少ない

(2) 本田の生育

1) 移植栽培

① 定点調査ほの生育概況

各地域振興局による調査（7月4日）では、あきたこまち（県内62地点）は、草丈59.9cm（平年比116%）、㎡当たり茎数455本（同88%）、葉数10.2葉（平年差±0.0葉）、葉緑素計値43.9（平年比98%）だった。平年より草丈が長く、茎数は少なかった。葉数や葉色は平年並だった。

ひとめぼれ（県央8地点）は、草丈60.9cm（平年比114%）、㎡当たり茎数523本（同90%）、葉数10.3葉（平年差+0.1葉）、葉緑素計値38.1（平年比94%）だった。平年より草丈が長く、茎数は少なかった。葉数は平年並、葉色は淡かった。

表－1 定点調査結果（各地域振興局調査：7月4日）

品種	地区	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	58.3	107	112	466	85	84	10.3	-0.4	0.0	43.4	98	98
	中央	61.2	106	115	457	81	94	10.5	-0.2	0.3	42.6	97	97
	県南	60.6	111	119	445	86	89	10.1	-0.4	0.0	44.7	100	99
	全県	59.9	108	116	455	84	88	10.2	-0.4	0.0	43.9	99	98
ひとめぼれ	中央	60.9	107	114	523	91	90	10.3	-0.2	0.1	38.1	96	94

② 農試気象感応試験の生育概況（あきたこまち）

7月4日現在、標植では、草丈64.6cm（平年比119%）、㎡当たり茎数487本（同82%）、葉数10.6葉（平年差+0.2葉）、葉緑素計値43.3（平年比100%）だった。また晩植では、草丈64.8cm（平年比126%）、㎡当たり茎数545本（同99%）、葉数10.3葉（平年差+0.1葉）、葉緑素計値40.8（平年比91%）だった。草丈は両区とも平年より長く、茎数は標植でかなり少なく、葉色は晩植で淡かった。

表－2 農試気象感応試験の生育概況（7月4日）

試験区	移植日	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
標植	5月15日	64.6	107	119	487	69	82	10.6	-0.4	+0.2	43.3	108	100
晩植	5月26日	64.8	120	126	545	85	99	10.3	-0.1	+0.1	40.8	88	91
理想生育量*1		46～51(cm)			478～576(本/㎡)			9.5～10.0(葉)			44～46(SPAD値)		

*1 あきたこまちにおける有効決定期の理想生育量(中央地域)

注) 平年値は、標植はH12～R6、晩植はH29～R6の平均。

2) 直播栽培

①全県の生育概況

7月4日の定点調査では、草丈45.7cm（平年比109%）、㎡当たり茎数524本（同85%）、葉数9.6葉（平年差+0.6葉）、葉緑素計値42.0（平年比98%）だった。平年より草丈は長く、茎数は少なく、葉数はやや多かった。

②農試直播作況ほ場の生育概況

7月4日の農試の調査結果では、草丈50.1cm（平年比118%）、㎡当たり茎数373本（同66%）、葉数9.0葉（平年差+0.2葉）、葉緑素計値42.3（平年比101%）だった。平年に比べ草丈が長く、茎数は少なかった。

表－3 調査結果（湛水直播 あきたこまち、農試および農業振興普及課7月4日調査）

設置場所	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
農 試	50.1	98	118	373	64	66	9.0	±0.0	+0.2	42.3	98	101
大館市	39.3	107	99	447	77	72	9.9	+0.3	+0.9	42.8	98	99
井川町	44.3	91	105	575	71	97	9.5	-0.7	+0.5	43.3	97	100
美郷町	51.4	116	114	580	96	92	9.5	-0.1	+0.1	40.2	94	94
横手市	43.7	124	111	646	114	99	9.9	+0.2	+1.2	41.5	105	96
全 県	45.7	107	109	524	84	85	9.6	-0.1	+0.6	42.0	99	98

注1) 平年値：過去10年間(H27～R6)の平均値

(3) 病害虫の発生概況

1) 葉いもち

B L A S T A M法による感染好適判定（県内アメダス24地点）では、6月26～28日に全県的な感染好適条件及び準感染好適条件が確認された。

予察ほ、防除適期決定ほにおける病斑増加状況調査（品種：ナツミノリ いもち病接種条件下での調査）では、6月26日に秋田市、6月30日に由利本荘市と大仙市、7月3日に横手市と湯沢市、7月4日に北秋田市で発病が確認されている。予察ほ、防除適期決定ほにおけるいもち病の感染は、秋田市では、感染好適条件の検出以前の6月18日頃に感染したと推定される。由利本荘市と大仙市は6月23日頃、北秋田市、横手市、湯沢市は、6月26～28日に感染したと推定される。

2) 斑点米カメムシ類

各予察灯（6地点）における6月6半旬までの総誘殺数はアカスジカスミカメが559頭（平年122.5頭）で多く、アカヒゲホソミドリカスミカメが278頭（平年179.9頭）でやや多かった。

3 当面の技術対策（7月中旬）

6月下旬以降、高温と周期的な曇雨天と晴天の気象変化で経過している。加えて少照により、草丈は長く推移しているほか、全県で葉いもちが確認されている。また、茎数は平年よりかなり少なく、地域やほ場差が大きく、有効茎数の不足から㎡当たり収数不足が大いに懸念されるほ場が多い。

現在、多くのほ場で中干しを実施しているが、7月中旬にかけて気温はかなり高い予報であり、田面が急に乾くことが予想される。加えて高温により幼穂形成期が早まる予測もあり、中干しを継続して幼穂形成期に入ると1穂粒数の減少、葉色の過剰な低下、田面の亀裂による根の切断など粒数や登熟に負の影響を及ぼす懸念があり、中干しを早めに終了する。

（１）中干し終了の目安

幼穂形成期に土壤水分が不足すると1穂粒数の減少を招くため、中干しは十分に乾かなくても幼穂形成期前に終了し、間断かん水に切り替える。中干し終了が遅れないよう、生育を見極めることが大切である。特に本年は茎数が少なかったため、中干し開始が遅く、田面の乾いていないほ場は多いとみられるが、中干し終了後の間断かん水で、落水期間をやや長めにし、徐々に田面が乾くよう努める。

なお、アメダス観測地点の平均気温と発育モデルから予測されるあきたこまち（中苗移植）の幼穂形成期（幼穂長2mm）は、7月6日以降の気温が平年より2℃高く経過した場合、県北地域の田植え盛期（5月24日）では、大館アメダス観測値で7月11日の予測となり、中央地域の田植え盛期（5月21日）では、大正寺アメダス観測値で7月10日、県南地域の田植え盛期（5月25日）では、横手アメダス観測値で7月10日の予測結果となった。また減数分裂期も平年より早まることも予想され、時機を逸しないよう栽培管理を徹底する（資料編p. 20、表－5、表－6参照）。

直播水稻では、転び型倒伏を防止するため、中干し終了後も落水期間をやや長めとする間断かん水により、土壤硬度を保つようにする。また、中干しが十分に出来なかった場合や、軟弱なほ場では、反復落水管理（穂ばらみ期や登熟初期の1週間程度の落水）を実施する。

（２）栄養診断に基づいた穂肥

本年の生育は茎数が少なく、草丈は長いため、生育診断が難しい草姿になっている。収量確保と今夏に予想される高温に対応するためにも、適期に診断を行い、追肥等の目安として活用する。

具体的には、幼穂形成期（幼穂長2mm）を確認し、栄養診断により穂肥の時期と量を決定して、適正な粒数（目標収量570kg/10a、㎡当たり粒数：30.3～31.5千粒）を確保する。なお、幼穂形成期に草丈が長いほ場では、穂肥は慎重に行う。（資料編p. 22、図－6参照）。

（３）カドミウム含有米の発生防止

カドミウム含有米の発生が懸念される地域で、「あきたこまちR」以外の品種では、カドミウムの吸収を抑制するために、出穂前後各3週間は常時水を張り、田面が空気に触れないようにする。（資料編p. 23関連記事掲載）

(4) 葉いもちの発病が確認されたほ場での防除

ほ場を巡回し、葉いもちの発病がないか確認する。特に、葉色の濃いほ場や生育過剰なほ場では注意する。発病が見られる場合は、直ちにブラシン剤またはノンブラス剤（予防剤と治療剤の混合剤）で茎葉散布を行う。その後は必要に応じてビーム剤を追加で散布する。

なお、薬剤の使用にあたっては、薬剤の使用回数及び成分の総使用回数を超えないよう注意する（令和7年6月24日発表 農作物病虫害発生予察情報 発生予報 第3号。（以下、「発生予報 第3号」）を参照）

(5) 雑草管理と斑点米カメムシ類の防除

農道や畦畔の草刈りは、イネの出穂15～10日前（平年7月20～25日頃）までに地域で一斉に行う。なお、水田畦畔刈り込み代用剤を使用する場合は、7月中旬までに散布する。

水田内のノビエやホタルイ等の雑草は、アカスジカスミカメの水田内への侵入を助長するので、除草対策を徹底する。中・後期除草剤の使用にあたっては、使用時期に注意するとともに、ほ場の発生草種や生育程度を観察して、適切な薬剤を選択する。（「発生予報 第3号」を参照）

(6) 紋枯病の防除

穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期に茎葉散布剤で防除する。その際、薬剤が株元に到達するように散布する。

粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場や本病を対象とした育苗箱施用剤を使っていないほ場に限る。散布時期はモンガリット粒剤が出穂20～10日前、リンバー粒剤が出穂15～5日前である。

（「発生予報 第3号」を参照）

(7) 稲こうじ病防除の防除

前年多発したほ場では出穂20～10日前に、ドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。

粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。

（「発生予報 第3号」を参照）

(8) ごま葉枯病の防除

砂質でかつ秋落ちが認められる水田で、過去に発生履歴がある場合は、出穂直前と穂揃期にノンブラスフロアブルまたはブラシフロアブルで防除する。また、同水田で発生履歴がない場合でも幼穂形成期～穂ばらみ期に発生が見られた場合は、出穂直前と穂揃期にノンブラスフロアブルまたはブラシフロアブルで防除する。

(9) 気象変化に対応した栽培管理

- 1) フェーンなど乾燥した風が強く吹く場合は湛水する。用水の利用は地域内で計画的に行い、用水量に応じた水管理に努める。
- 2) 大雨のおそれがある場合は、事前に排水路等の点検や補修を行う。冠浸水被害を受けたほ場では、速やかな排水に努める。
- 3) 冷害危険度の高い地域では、日平均気温20℃以下の低温や最低気温17℃以下が予想される場合、幼穂形成期に入ったら水深を10cm位に保つ深水管理（前歴深水管理）を10日間程度実施する。
（令和7年稲作指導指針p.121～134参照）

(10) 農薬の飛散防止と安全使用の徹底

- 1) 農薬散布前に使用農薬のラベルの適用作物・使用方法等を確認する。
- 2) 農薬散布時は、周辺作物などへの飛散防止対策を徹底する。
- 3) 健康管理や服装・装備等を万全にし、散布作業は涼しい時間帯に行う。
- 4) 農薬散布後は、防除器具を確実に洗浄する。
- 5) 防除履歴は必ず記録する。

(11) 農作業中の熱中症対策

- 1) 高温時の作業は極力避け、日陰や風通しの良い場所で作業する。
- 2) 喉の渇きを感じる前に、こまめに水分・塩分を補給する。
- 3) 単独作業は避け、複数人で作業を行うよう心がけて、時間を決めて連絡をとり合う。
- 4) 帽子や吸湿速乾性の衣服の着用や空調服や送風機を活用する。
- 5) 熱中症が疑われる場合には、作業を中断し、涼しい環境へ避難し水分を補給するなど応急処置に努める。症状が改善しない場合は早めに医療機関で診察を受ける。

【時期別・主要作業別指導事項】

月 旬	作業の種類	主 な 指 導 事 項
7 月中旬 ～ 7 月下旬	水管理	○中干しは、幼穂形成期前に終了する。 ○中干し後は間断かん水とする。 ○中干しが十分にできなかったほ場では、中干し終了後の間断かん水時に落水期間をやや長くし、田面の乾燥を図る。 ○直播栽培では、落水期間をやや長めとする間断かん水を行い、軟弱ほ場では反復落水管理を行う。 ○カドミウム含有米の発生が懸念される地域で、「あきたこまちR」以外の品種では、出穂前後各3週間は湛水管理とする。
	栄養診断の実施	○移植栽培で、追肥体系の施肥方法の場合は、幼穂形成期を確認し、栄養診断結果に基づき、追肥の時期と量を慎重に決定する。
	葉いもちの検診と防除	○ほ場を巡回し、葉いもちの発病がないか確認する。 ○いもち病の発病が見られるほ場では、直ちに防除する。
	雑草管理と斑点米カメムシ類の防除	○斑点米カメムシ類の増殖を抑える（密度抑制）ため、農道・畦畔の草刈りは稲が出穂する15～10日前までに行う。 ○水田内のノビエやホタルイ等の除草を徹底する。中・後期剤を散布する際は使用時期に注意する。
	紋枯病の防除	○粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場や本病を対象とした育苗箱施用剤を使っていないほ場に限定し、薬剤に応じて出穂20～10日前、又は出穂15～5日前に防除する。 ○穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期に茎葉散布剤で防除する。
	稻こうじ病の防除	○前年多発したほ場では出穂20～10日前に、ドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。 ○粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。
	ごま葉枯病の防除	○砂質でかつ秋落ちが認められる水田で、過去に発生履歴がある場合は、出穂直前と穂揃期にノンブラスフロアブルまたはブラシンフロアブルで防除する。また、同水田で発生履歴がない場合でも幼穂形成期～穂ばらみ期に発生が見られた場合は、出穂直前と穂揃期にノンブラスフロアブルまたはブラシンフロアブルで防除する。
	農薬飛散防止と安全使用	○散布前に使用農薬のラベルの適用作物・使用方法等を確認し、散布時は周辺作物などへの飛散防止対策を徹底する。 ○散布作業は涼しい時間帯に行い、休憩・水分補給を適宜行う。

大豆

適期に中耕・培土の実施を

- － 排水対策のため、明きよの点検・補修 －
- － 残草は除草剤による防除を徹底 －

1 大豆の生育概況

(1) 全県の概況（各地域振興局調べ）

田植え作業の遅れや5月下旬の降雨の影響で、播種作業はやや遅れた。播種始期は6月5日（平年差＋4日）、播種盛期は6月16日（平年差＋3日）だった。出芽・苗立ちは概ね良好だった。

(2) 農業試験場（大豆作況調査試験）

6月30日におけるリュウホウ（標播、6月3日播種）の生育は、草丈32.7cm（平年比142%）、主茎節数5.1（平年差＋0.9）と、草丈は平年より長く、主茎節数は平年より多かった（表－1）。

6月20日に播種したリュウホウ（晩播）の出芽期までの日数は、6日（平年差－1日）であった。

表－1 農業試験場における大豆の生育概況（7月1日）

品種名	草 丈			主茎節数		
	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (節)	前年差 (節)	平年差 (節)
リュウホウ	32.7	115	142	5.1	+0.1	+0.9

1) 農試作況調査ほ場の6月3日播種（標播）の調査データを示す。

2) 主茎節数は子葉節を1とする。

3) 平年値は平成27～令和6年のうち最大値と最小値を除いた8か年の平均値。

2 当面の技術対策

向こう1か月の降水量は少ないと予報されているが、引き続き排水対策を徹底し、湿害を回避するとともに、土壤水分の状態等を見極め、適期の培土作業に努める。

(1) 排水対策の徹底

降雨による停滞水が速やかに排水されるよう、明きよの点検や補修を随時行う。

（令和7年6月30日発行の作況ニュース第4号参照）

(2) 培土の実施

降雨に伴い雑草の発生は旺盛となることが懸念される。このため、生育の安定化だけでなく、雑草防除の観点からも適期の培土作業は重要となるため、次の事項に注意して適期に培土を行う。

- 1) 遅い時期の培土は、断根や作物体損傷による生育への悪影響のおそれがあるため、最終培土は遅くとも開花の10日前には終了する。農試作況調査におけるリュウホウの平年の開花期は、6月3日播種が7月26日、6月20日播種が8月3日である。
- 2) 培土作業は収穫時の作業性も考慮し、最終的な培土の高さを本葉第1節が隠れない15～20cm程度とする（令和7年6月30日発行の作況ニュース第4号参照）。過度の培土は不定根の発生を悪くするほか、最下着莢高が低くなりコンバイン収穫時の収穫ロスや汚損粒の発生にもつながる。
- 3) 土壌水分が高い時の培土は、株元への培土が不十分となり、株元に残った雑草はその後大型化し、除草剤等による除草が困難になる。このため、最終培土は土壌表面がある程度乾いた状態で行い、畦間の土を砕土・攪拌しながら、確実に大豆の株元に土を寄せる。

(3) 雑草防除

中耕・培土で雑草を抑えられなかった場合、土壌水分が高く中耕・培土が出来なかった場合などは、手取りまたは大豆生育期処理除草剤により雑草防除を行う。大豆生育期処理除草剤は、薬剤によって使用時期等が異なるので使用基準を確認し、適期に防除する。

（令和7年度版秋田県農作物病虫害・雑草防除基準p. 349～356を参照）

1) ノビエ、メヒシバ等のイネ科雑草

ナブ乳剤、ワンサイドP乳剤、ポルトフロアブルのいずれかを散布する。

2) タデ類、アメリカセンダングサ等の広葉雑草

大豆バサグラン液剤の効果が高い。ただし、適用品種はリュウホウに限る。

なお、大豆バサグラン液剤は、高温時や日射が強い場合、湿害等による生育不良のほかで薬害が助長されることがあるため、散布日の天候や生育を考慮して散布する。

3) アレチウリ、アメリカアサガオ、マルバルコウ等のつる性の帰化雑草（資料編p. 24参照）やシロザ等の広葉雑草

アタックショット乳剤の効果が高い。ただし、湿害等により大豆が軟弱気味に生育している場合や処理後に連続した降雨が予想される場合、処理後3日間の平均気温が17℃を下回ると予想される場合は、強い薬害を生じるおそれがあるため使用しない。

4) 取りこぼしのあった雑草や大型化する雑草、防除の難しい雑草（シロザ・エノキグサ・ツユクサ・イヌホオズキ・帰化アサガオ類・アレチウリ等、資料編p. 24参照）

バスタ液剤による畦間・株間処理または大豆バサグラン液剤、ザクサ液剤、ラウンドアップマックスロードによる畦間処理を行う。また、帰化アサガオ類やアレチウリに対してはバスタ液剤またはザクサ液剤を使用する。なお、バスタ液剤とザクサ液剤の成分は同一成分として総使用回数に数えるので注意する。

畦間・株間処理や畦間処理にあたっては、薬液付着に伴う薬害を防止するため、専用の飛散防止カバーや専用ノズルを必ず使用する。

(4) 病虫害防除

当面は食葉性害虫（ツメクサガ、コガネムシ類等）やアブラムシ類の発生に注意し、ほ場の観察により早期発見に努め、発生状況に応じて防除を行う。なお、ハスモンヨトウやオオタバコガなどの長距離移動性害虫は、急激に発生量が増加することがあるため、今後の予察情報に注意する。

(5) 開花期以降の土壤水分の保持

大豆は、開花～子実肥大期にかけて水分を多く必要とし、乾燥が続くと減収することがあるため、1)、2)の対策により、大豆の好適な地下水位（40cm程度）の保持に努める。

なお、著しい高温少雨に遭遇した場合、3)、4)にある畝間かん水や明きょへのかん水等の対策があるが、十分な用水量が確保でき、速やかな排水が行えるほ場など実施可能な条件に限られるため、ほ場条件を確認した上で実施を検討する。

1) 梅雨明け後の暗きょの操作

梅雨明け後は、暗きょ栓を閉めて土壤中の水分の保持に努める。ただし、まとまった降雨がある場合は、暗きょ栓を開いて排水を図る。

2) 地下かんがいシステムが備わっているほ場について

梅雨明け後は、暗きょ栓を閉めて地下水位を40cmに設定し、降雨を土壤に貯留するように努める。

地下かんがいは、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している場合や、日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える等を目安に実施する。この時の地下水位は20～30cm程度に設定し、1日給水した後、暗きょ栓を開放して排水する。

3) 畝間かん水の日安と留意点

畝間かん水は、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している、日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える等を目安に実施する。

30a以上の大きなほ場の場合は、ほ場を2～3区画程度に分け、1日1区画ずつ2～3日に分けて実施し、畝の崩壊と水口付近の湿害を防ぐ。ほ場（区画）全体に水が行き渡ったら水口をしっかり止め、速やかに排水する。なお、かん水は、気温・地温が低下する朝夕の時間帯に行う。

ただし、水回りが悪いほ場や、速やかな排水を行えないほ場では、湿害等が発生することがあるため実施しない。

4) 明きょへのかん水の日安と留意点

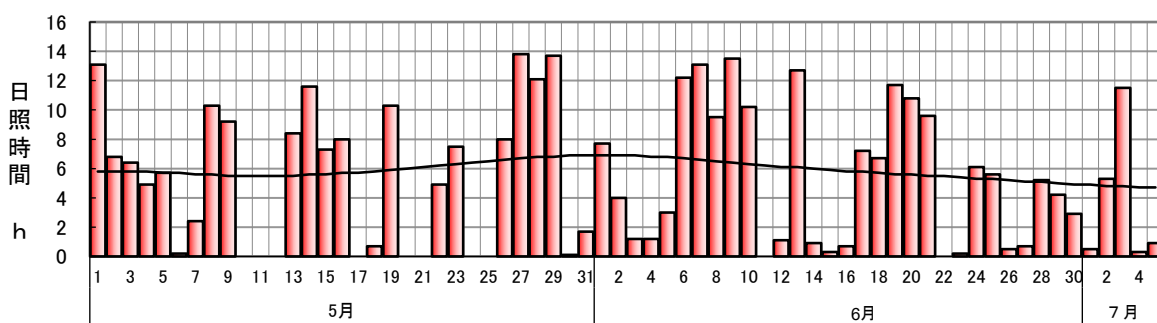
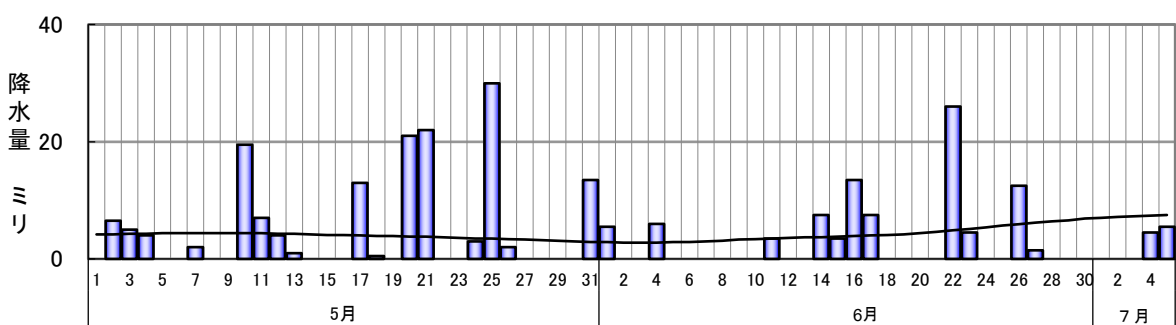
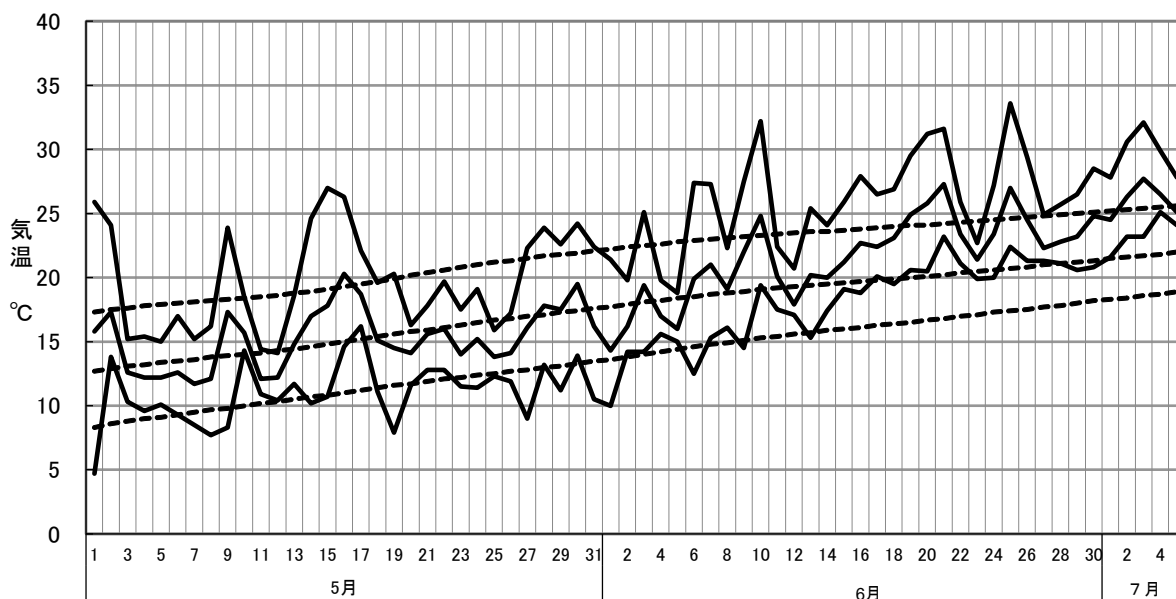
排水口を閉じ、明きょ全体に水を行き渡らせ、その後は速やかに排水する。

資 料 編

1 気象経過

(1) 令和7年5月1日から7月5日の気象経過図（観測地点：秋田地方気象台）

（気象庁HPより）

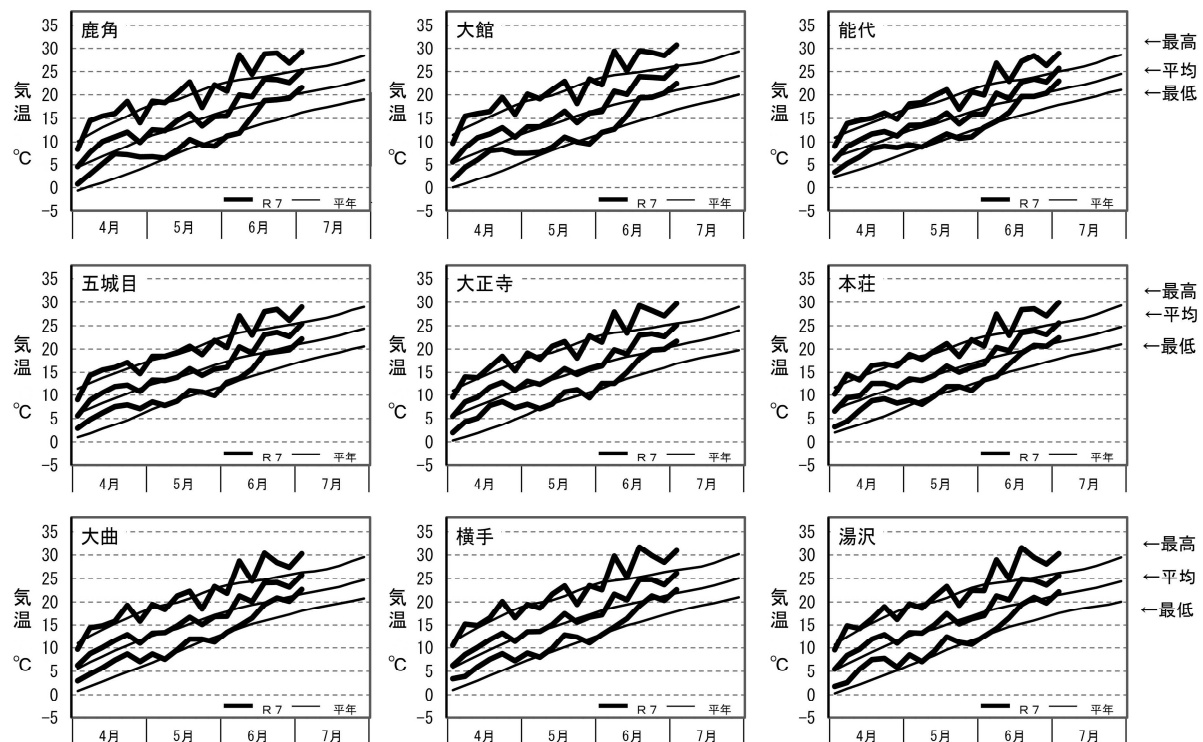


(2) 旬別気象状況 (秋田市)

(秋田地方気象台HPより)

時 期 項 目	6 月上旬		6 月中旬		6 月下旬		6 月 計	
	本 年	平年比較	本 年	平年比較	本 年	平年比較	本 年	平年比較
平均気温(℃)	19.1	+0.7	21.8	+2.2	24.0	+3.3	21.6	+2.0
降 水 量(mm)	11.5	49%	35.5	86%	44.5	77%	91.5	74%
日照時間(h)	75.6	110%	52.1	90%	35.0	66%	162.7	91%

(3) 地域別気象経過 (アメダス観測地点、半旬別気温、7月5日現在)



2 定点調査結果（各地域振興局調査 7月4日）

表－1 定点調査結果（品種：あきたこまち）

地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
鹿角	5	58.5	109	118	465	77	74	10.5	-0.4	0.3	45.3	99	99
北秋田	9	59.3	106	111	491	81	87	10.4	-0.4	0.0	42.4	94	97
山本	9	57.3	106	109	444	96	88	10.1	-0.5	-0.1	43.2	101	98
秋田	10	61.6	104	114	454	81	93	10.6	-0.2	0.2	43.1	99	98
由利	2	59.5	112	127	470	82	98	10.0	0.0	0.3	40.3	90	94
仙北	10	60.8	110	119	448	85	88	10.1	-0.4	0.1	44.3	97	99
平鹿	11	60.1	114	119	425	83	87	10.1	-0.2	0.1	45.2	102	100
雄勝	8	61.3	109	118	469	89	93	10.1	-0.6	-0.1	44.5	100	97
全県平均	62	59.9	108	116	455	84	88	10.2	-0.4	0.0	43.9	99	98
7月5日の 理想生育量		目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限
	県北	47	45	50	550	512	588	9.8	9.6	10.0	43	42	44
	中央	49	46	51	527	478	576	9.8	9.5	10.0	45	44	46
	県南	47	45	50	462	440	484	9.8	9.6	10.0	44	43	45

表－2 定点調査結果（品種：ひとめぼれ）

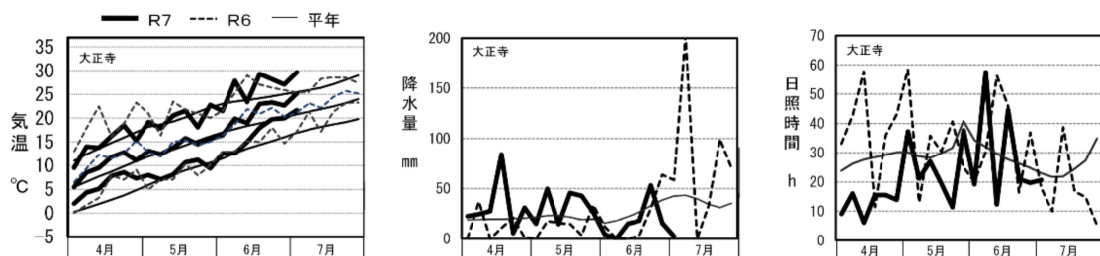
地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
秋田	2	54.4	106	109	508	86	86	10.4	-0.1	0.3	41.1	100	99
由利	6	63.1	107	116	529	92	92	10.3	-0.2	0.0	37.1	95	92
中央地区平均	8	60.9	107	114	523	91	90	10.3	-0.2	0.1	38.1	96	94

3 関連成績

（1）気象感応試験

1）稲作期間の気象（6月下旬から7月1半旬）

6月5半旬以降は、気温は平年より高く、特に最低気温が高く経過し、気温日較差の小さい期間だった。また、曇雨天と晴天が周期的に変わり、降水量は平年より少ないものの、日照時間も平年よりやや少なく経過した。



図－1 令和7年の稲作期間中の気象経過（アメダス観測地点「大正寺」、半旬別、7月5日現在）

2) 生育概況

草丈は両区で平年よりかなり長く、茎数は標植がかなり少なく、晩植は平年並だった。葉数は標植で平年差+0.2葉、晩植で+0.1葉と概ね平年並、葉緑素計値は標植で平年並だが、晩植は低かった。両区とも6月25日から中干しを開始した。

茎数増加の鈍化は、6月4半旬以降、最低気温がかなり高く経過し、気温日較差の小さい期間が続いたことが大きい要因と考えられる。

表－1 気象感応試験（7月4日）の生育概況（あきたこまち）

試験区	移植日	草 丈					㎡当たり茎数					葉 数					葉緑素計値				
		R7 cm	R6 cm	R6比 %	平年 cm	平年比 %	R7 本	R6 本	R6比 %	平年 本	平年比 %	R7 葉	R6 葉	R6差 葉	平年 葉	平年差 葉	R7	R6	R6比 %	平年	平年比 %
標植	5月15日	64.6	60.2	107	54.1	119	487	701	69	592	82	10.6	11.0	-0.4	10.5	+0.2	43.3	40.0	108	43.1	100
晩植	5月26日	64.8	53.9	120	51.4	126	545	639	85	548	99	10.3	10.4	-0.1	10.2	+0.1	40.8	46.4	88	44.7	91

注) 平年値は、標植はH12～R6、晩植はH29～R6の平均。

3) 出葉状況

標植の出葉は、第8～10葉は平年差+1日で経過したが、第11葉は-1日と早かった。晩植では、第10葉は平年差-2日と早い出葉だったが、第11葉では-1日と少し鈍化した。

両区とも概ね平年並の出葉だが、晩植の第11葉の出葉鈍化は、第10葉の葉身長が長かったことにより、出葉が遅れたと推定される。

表－2 出葉期の平年比較（気象感応試験 7月4日調査）

試験区	年次	出葉期								
		5葉	6葉	7葉	8葉	9葉	10葉	11葉	12葉	13葉
標植 (5月15日移植 基準)	R7	5/25	6/1	6/7	6/12	6/17	6/23	6/30		
	R6	5/23	5/30	6/4	6/9	6/14	6/18	6/25	7/6	7/14
	平年	5/23	5/29	6/4	6/11	6/16	6/22	7/1	7/11	7/18
	平年差	+2	+3	+3	+1	+1	+1	-1		
晩植 (5月25日移植 基準)	R7	6/1	6/7	6/12	6/17	6/21	6/25	7/3		
	R6	5/31	6/6	6/10	6/14	6/20	6/24	7/2	7/11	7/19
	平年	5/31	6/6	6/11	6/16	6/21	6/27	7/4	7/13	7/21
	平年差	+1	+1	+1	+1	±0	-2	-1		

注) 標植の平年値は、H12～R6までの平均。晩植の平年値は、H29～R6までの平均。

4) 分げつの発生状況

標植では、1次分げつの4～7節の発生は平年並だが、2次分げつでは3～5号で平年より少なかった。1次3節の分げつが平年より少ないことにより、2次3節の分げつも少なく、さらに6月下旬の気温日較差が小さかったことにより、2次4、5節での発生が少なかったと考えられる。

晩植は、1次分げつの2節、3節の発生が平年よりやや少なく、2次分げつでは、特に3節の発生が少なかった。標植と同様に6月下旬の気象により分げつ発生が急に鈍化したと考えられる。

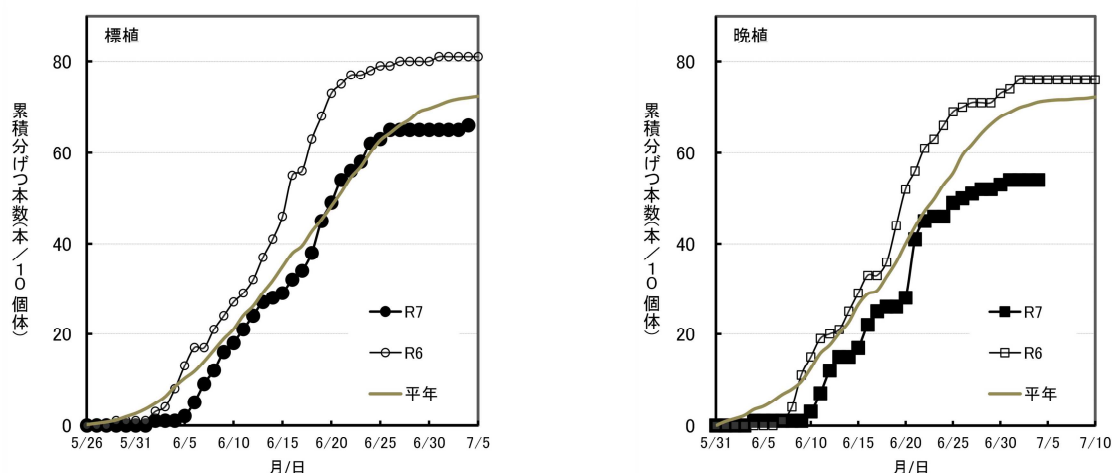
累積分げつ本数の推移からも標植では6月23日頃、晩植では6月25日頃から分げつの発生が鈍化していることが明らかだった。

表－3 7月4日現在の分げつ発生状況（本／10個体）

試験区	1次分げつ								2次分げつ					
	1節	2節	3節	4節	5節	6節	7節	8節	1節	2節	3節	4節	5節	6節
標植	1	4	4	10	10	10	6		1	3	5	9	5	
(平年)	0	3	7	10	10	10	7	1	1	2	9	12	7	1
晩植	0	1	5	10	10	10	4		0	1	2	11	2	
(平年)	0	3	7	10	10	10	6	1	0	2	8	14	6	1

注1) 平年は、標植；H13年～R6年の平均、晩植；H29年～R6年の平均。

注2) 小数点以下切り上げによる表記のため、分げつの合計数と図-2の累積分げつ本数とは異なる。

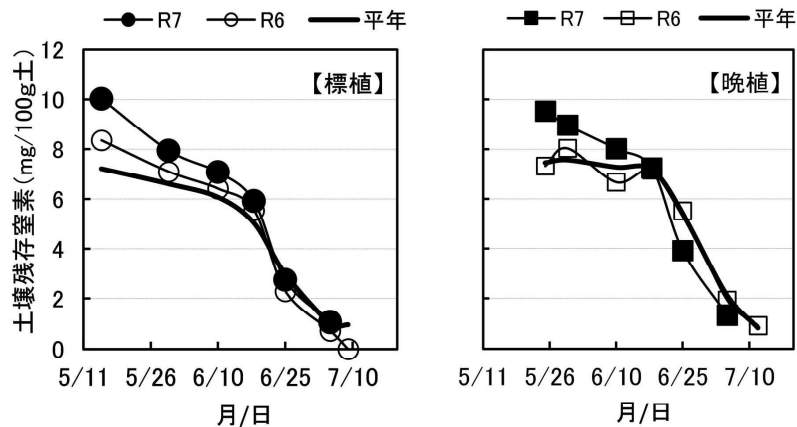


図－2 分げつの発生推移（10個体合計）

累積分げつ本数は10個体あたりの値、平年値は標植；H12～R6年、晩植；H29～R6年の平均

5) 土壌残存窒素量(7月4日現在)

7月4日現在、標植の土壌残存窒素量は、1.1 mg/100g土で平年並、晩植では1.3mg/100g土と平年を下回った。標植の茎数は少ないものの、草丈が長いこと、晩植では茎数は平年並で草丈が長いことから、水稻の生育量は平年並から上回っており、これに伴って窒素吸収量も多く、土壌の無機態窒素量が平年並から下回ったと推測される。今後は急激な葉色の低下に注意する。



図－3 土壌残存窒素量の推移

注) 基肥窒素量: N 7 g/m²。平年値: 標植はH12～R6、晩植はH29～R6の平均値

(2) 直播作況試験

1) 生育概況

7月4日の農試の調査結果は、草丈50.1cm (平年比118%)、m²当たり茎数373 (同66%)、茎数増加比8.1 (平年差+1.6)、葉数9.0葉 (同+0.2葉)、葉緑素計値42.3 (平年比101%) だった。平年より草丈は長く、茎数は少なくなっている。

表－4 農試直播作況ほ場の生育概況 (あきたこまち、湛水土中条播、5月9日播種)

調査 月日	草丈			m ² 当たり茎数			茎数増加比			葉数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年	前年差	平年差	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
7/4	50.1	98	118	373	64	66	8.1	+2.0	+1.6	9.0	±0.0	+0.2	42.3	98	101

注1) 平年値: 過去10年間 (H27～R6) の平均値

注2) 茎数増加比 = 茎数/苗立数

注3) 苗立数は6月10日現在で46本/m² (平年比55%)

4 今後の生育の見通しと栽培管理

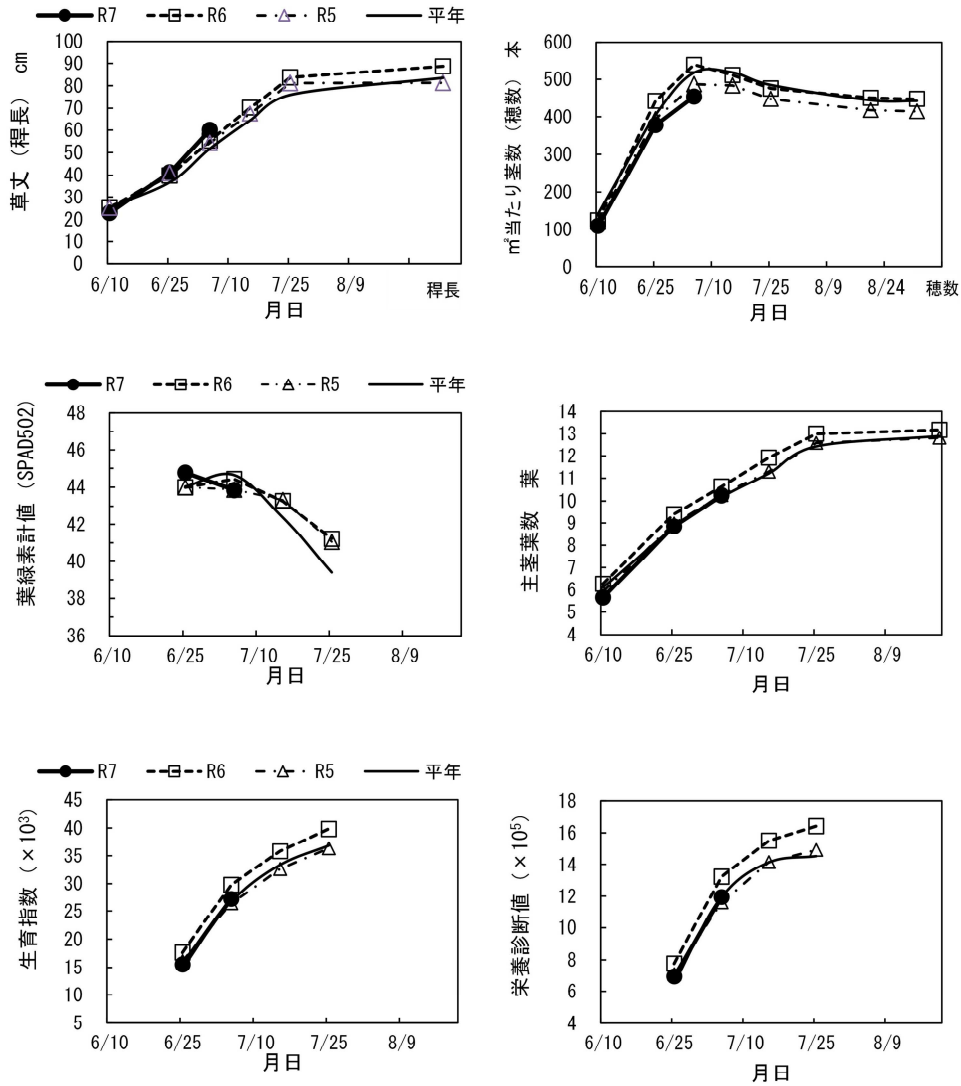
(1) 本年の水稻生育の特徴 (各地域振興局、定点調査結果)

7月4日現在、全県のあきたこま치의生育は、草丈は平年より長く、茎数は平年を大きく下回っているほ場が多い。葉緑素計値は平年並～やや低く、葉数は平年並である。また全県平均の生育指数と栄養診断値は、平年並に経過している (図－4)。

一方で生育のほ場間差が大きく、葉数が進んでもm²当たり茎数が400本に満たないほ場も見られる (図－5)。また、葉数では11葉期に近いほ場もあることから、各ほ場の幼穂形成期を把握して、栄養診断に基づいた追肥の時期と量を決定する。

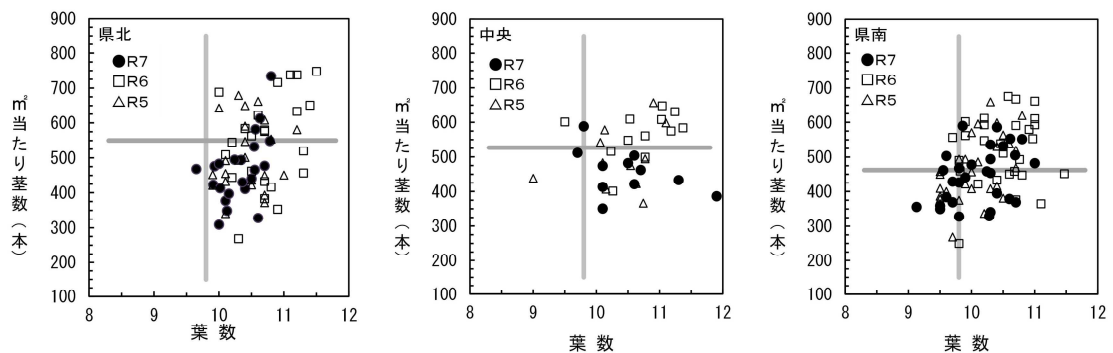
全般に令和5年に類似した生育経過になっており、m²当たり籾数を確保するための栽培管理を徹底する (図－4)。

※令和5年は、夏季の異常高温により玄米品質が大幅低下した年であるが、収量は平年比98%だった。高温により登熟は良かったため収量の低下は最小限だったが、m²当たり穂数は平年比93%、m²当たり籾数は同92%と、収量構成からみると作柄不良の要素が強い年だった。



図－４ 各地域振興局定点調査結果（あきたこまち、全県平均）

生育指数＝草丈(cm)×茎数(本/m²)、栄養診断値＝草丈(cm)×茎数(本/m²)×葉緑素計値



図－５ 調査地点別葉数と茎数の関係（あきたこまち）

縦横線は地域別理想生育水準（交点“+”が理想生育値）

(2) 幼穂形成期（幼穂長2mm期）および減数分裂期の予測（表－5、表－6）

各アメダス観測地点の7月5日までの平均気温と7月6日以降の平年気温を用いた発育モデルによる「あきたこまち」の苗種別、移植期別の幼穂形成期および減数分裂期への到達時期予測を示した。地点、移植日、苗の種類から、該当する到達時期を参照し、ほ場における各生育ステージの目安とする。

※最新の気温データを加味した生育予測は下記URLで確認できる。

(<https://rice-forecast.s3.ap-northeast-1.amazonaws.com/index.html>)

表－５ 幼穂形成期の予測（あきたこまち）

アメダス 観測地点	移植時期	稚苗			中苗		
	５月〇日	7月6日以降の想定気温経過（平年の日平均気温に対する差）					
		＋2℃	±0℃	－2℃	＋2℃	±0℃	－2℃
鹿角	10日	7月9日	7月10日	7月10日	7月6日	7月6日	7月6日
	15日	7月12日	7月13日	7月14日	7月8日	7月8日	7月9日
	20日	7月16日	7月17日	7月18日	7月11日	7月12日	7月13日
	25日	7月18日	7月19日	7月21日	7月13日	7月14日	7月15日
大館	10日	7月8日	7月8日	7月8日	7月4日	7月4日	7月4日
	15日	7月11日	7月11日	7月12日	7月6日	7月6日	7月6日
	20日	7月14日	7月15日	7月16日	7月9日	7月9日	7月10日
	25日	7月17日	7月18日	7月19日	7月11日	7月12日	7月12日
鷹巣	10日	7月9日	7月9日	7月9日	7月5日	7月5日	7月5日
	15日	7月11日	7月12日	7月13日	7月7日	7月7日	7月7日
	20日	7月15日	7月15日	7月17日	7月10日	7月10日	7月11日
	25日	7月17日	7月18日	7月20日	7月12日	7月13日	7月14日
能代	10日	7月9日	7月9日	7月10日	7月5日	7月5日	7月5日
	15日	7月12日	7月12日	7月13日	7月7日	7月8日	7月8日
	20日	7月15日	7月16日	7月17日	7月10日	7月11日	7月12日
	25日	7月18日	7月19日	7月20日	7月12日	7月13日	7月14日
大潟	10日	7月8日	7月8日	7月8日	7月4日	7月4日	7月4日
	15日	7月11日	7月11日	7月12日	7月6日	7月6日	7月6日
	20日	7月14日	7月15日	7月16日	7月9日	7月9日	7月10日
	25日	7月17日	7月18日	7月19日	7月11日	7月12日	7月13日
秋田	10日	7月9日	7月9日	7月10日	7月6日	7月6日	7月6日
	15日	7月12日	7月12日	7月13日	7月8日	7月8日	7月8日
	20日	7月15日	7月16日	7月17日	7月10日	7月11日	7月11日
	25日	7月17日	7月19日	7月20日	7月12日	7月13日	7月14日
大正寺	10日	7月8日	7月8日	7月9日	7月4日	7月4日	7月4日
	15日	7月11日	7月11日	7月12日	7月6日	7月6日	7月6日
	20日	7月14日	7月15日	7月16日	7月9日	7月10日	7月10日
	25日	7月17日	7月18日	7月20日	7月11日	7月12日	7月13日
本荘	10日	7月7日	7月7日	7月7日	7月3日	7月3日	7月3日
	15日	7月10日	7月10日	7月11日	7月5日	7月5日	7月5日
	20日	7月13日	7月14日	7月15日	7月8日	7月8日	7月9日
	25日	7月16日	7月17日	7月18日	7月10日	7月11日	7月12日
大曲	15日	7月9日	7月14日	7月20日	7月3日	7月10日	7月17日
	20日	7月12日	7月17日	7月23日	7月7日	7月13日	7月20日
	25日	7月16日	7月21日	7月26日	7月10日	7月16日	7月23日
	30日	7月19日	7月24日	7月29日	7月13日	7月19日	7月25日
角館	15日	7月9日	7月9日	7月10日	7月4日	7月4日	7月4日
	20日	7月12日	7月13日	7月14日	7月7日	7月7日	7月7日
	25日	7月15日	7月16日	7月17日	7月9日	7月10日	7月10日
	30日	7月18日	7月20日	7月21日	7月12日	7月13日	7月14日
横手	15日	7月9日	7月10日	7月10日	7月4日	7月4日	7月4日
	20日	7月13日	7月13日	7月14日	7月7日	7月8日	7月8日
	25日	7月15日	7月16日	7月18日	7月10日	7月10日	7月11日
	30日	7月19日	7月20日	7月21日	7月12日	7月13日	7月14日
湯沢	15日	7月12日	7月12日	7月13日	7月7日	7月8日	7月8日
	20日	7月15日	7月16日	7月17日	7月10日	7月11日	7月11日
	25日	7月17日	7月19日	7月20日	7月12日	7月13日	7月14日
	30日	7月20日	7月22日	7月23日	7月15日	7月16日	7月17日

※欠測日および７月６日以降の値は、平年値を代用し計算した。

表－６ 減数分裂期の予測（あきたこまち）

アメダス 観測地点	移植時期	稚苗			中苗		
	5月〇日	7月6日以降の想定気温経過（平年の日平均気温に対する差）					
		＋ 2℃	± 0℃	－ 2℃	＋ 2℃	± 0℃	－ 2℃
鹿角	10日	7月22日	7月24日	7月26日	7月19日	7月21日	7月23日
	15日	7月25日	7月27日	7月29日	7月21日	7月23日	7月26日
	20日	7月28日	7月30日	8月2日	7月24日	7月26日	7月29日
	25日	7月30日	8月1日	8月4日	7月26日	7月28日	7月31日
大館	10日	7月20日	7月22日	7月23日	7月17日	7月18日	7月20日
	15日	7月22日	7月24日	7月26日	7月19日	7月20日	7月22日
	20日	7月25日	7月27日	7月30日	7月21日	7月23日	7月26日
	25日	7月28日	7月30日	8月2日	7月23日	7月26日	7月28日
鷹巣	10日	7月21日	7月23日	7月25日	7月18日	7月19日	7月21日
	15日	7月23日	7月25日	7月27日	7月20日	7月22日	7月24日
	20日	7月26日	7月28日	7月31日	7月22日	7月24日	7月27日
	25日	7月28日	7月31日	8月2日	7月24日	7月26日	7月29日
能代	10日	7月21日	7月23日	7月25日	7月18日	7月19日	7月21日
	15日	7月24日	7月25日	7月28日	7月20日	7月22日	7月24日
	20日	7月26日	7月28日	7月31日	7月23日	7月25日	7月27日
	25日	7月28日	7月31日	8月2日	7月24日	7月27日	7月29日
大潟	10日	7月20日	7月22日	7月24日	7月17日	7月18日	7月20日
	15日	7月23日	7月24日	7月26日	7月19日	7月21日	7月23日
	20日	7月25日	7月27日	7月30日	7月22日	7月24日	7月26日
	25日	7月28日	7月30日	8月2日	7月24日	7月26日	7月28日
秋田	10日	7月21日	7月23日	7月24日	7月18日	7月19日	7月21日
	15日	7月23日	7月25日	7月27日	7月20日	7月21日	7月24日
	20日	7月26日	7月28日	7月30日	7月22日	7月24日	7月26日
	25日	7月28日	7月30日	8月2日	7月24日	7月26日	7月29日
大正寺	10日	7月20日	7月22日	7月24日	7月17日	7月18日	7月20日
	15日	7月23日	7月25日	7月27日	7月19日	7月21日	7月23日
	20日	7月26日	7月28日	7月30日	7月22日	7月24日	7月26日
	25日	7月28日	7月31日	8月2日	7月24日	7月26日	7月29日
本荘	10日	7月19日	7月20日	7月22日	7月15日	7月17日	7月18日
	15日	7月21日	7月23日	7月25日	7月18日	7月19日	7月21日
	20日	7月24日	7月26日	7月28日	7月20日	7月22日	7月24日
	25日	7月27日	7月29日	7月31日	7月22日	7月24日	7月27日
大曲	15日	7月20日	7月27日	8月3日	7月16日	7月23日	8月1日
	20日	7月23日	7月30日	8月6日	7月19日	7月26日	8月3日
	25日	7月27日	8月2日	8月9日	7月22日	7月29日	8月6日
	30日	7月30日	8月5日	8月12日	7月25日	8月1日	8月8日
角館	15日	7月20日	7月22日	7月24日	7月16日	7月18日	7月20日
	20日	7月24日	7月25日	7月28日	7月19日	7月21日	7月23日
	25日	7月26日	7月28日	7月31日	7月22日	7月24日	7月26日
	30日	7月29日	7月31日	8月3日	7月24日	7月27日	7月29日
横手	15日	7月21日	7月22日	7月24日	7月17日	7月18日	7月20日
	20日	7月24日	7月25日	7月28日	7月20日	7月21日	7月23日
	25日	7月26日	7月28日	7月30日	7月22日	7月24日	7月26日
	30日	7月29日	7月31日	8月3日	7月24日	7月26日	7月29日
湯沢	15日	7月23日	7月25日	7月27日	7月20日	7月22日	7月24日
	20日	7月26日	7月28日	7月31日	7月22日	7月24日	7月27日
	25日	7月28日	7月31日	8月2日	7月24日	7月26日	7月29日
	30日	7月31日	8月2日	8月5日	7月27日	7月29日	8月1日

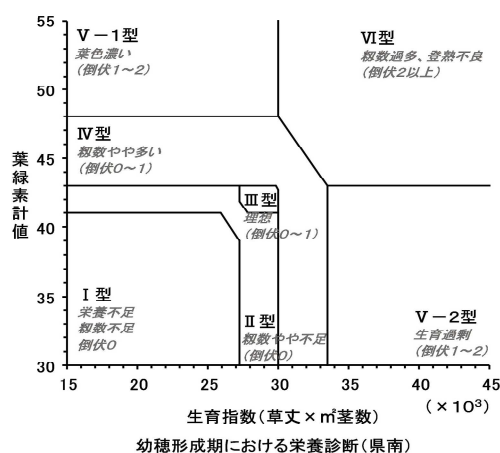
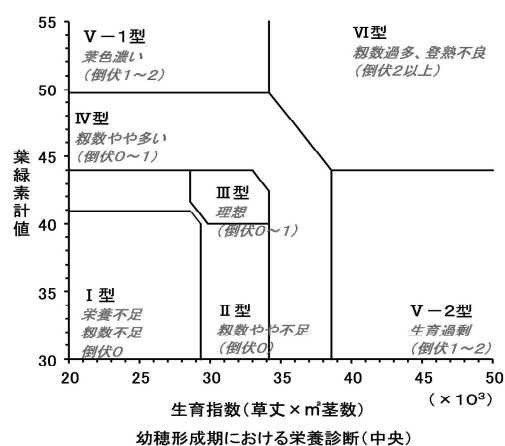
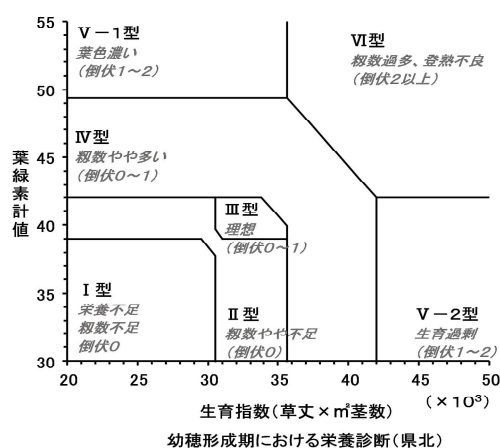
※欠測日および7月6日以降の値は、平年値を代用し計算した。

(3) 栄養診断に基づく「あきたこまち」の栽培管理

1) 幼穂形成期（幼穂長2mm、11葉期頃）における栄養診断

追肥の目安は、栄養診断図に示したⅠ～Ⅴ型の生育型に対応した窒素追肥量を参考にする。ただし肥効調節型肥料を基肥等で使用した場合、追肥は、施用済み窒素成分量などを考慮し、慎重に判断する。

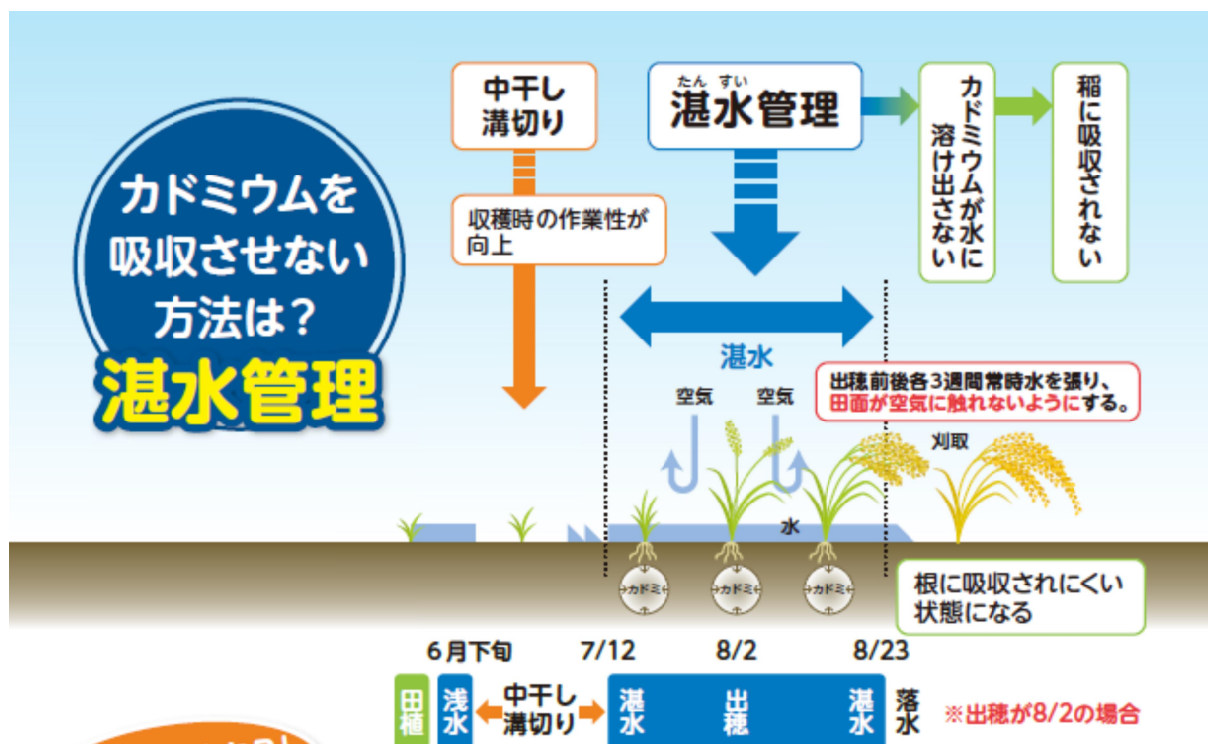
また、幼穂形成期の生育調査により栄養診断図のⅥ型に該当する場合は、緊急処置として倒伏軽減剤の使用を検討する。



生育型	窒素追肥量(kg/10a)	
	幼穂形成期	減数分裂期
Ⅰ型	2kg	2kg
Ⅱ型	2kg	2kg
Ⅲ型	ムラ直し1kg	2kg
Ⅳ型	なし	2kg
Ⅴ-1型	なし	ムラ直し1kg
Ⅴ-2型	なし	ムラ直し1kg
Ⅵ型	なし	なし

(注) 目標収量 570kg/10a、あきたこまち

図－6 幼穂形成期における栄養診断図
(稲作指導指針p. 75～78参照)



「あきたこまちR」
以外の品種

湛水管理のポイント

- 6月下旬から「中干し」を開始！ その際、強い中干しは避ける！
- ぬかりやすく、水はけが悪い水田では、中干しの際に「溝切り」を実施する！
- 「出穂前後各3週間」は常時水を張り、田面を空気に触れさせない！ 完全落水は遅めにする！

※「あきたこまちR」は湛水管理が不要のため、通常の水管理を行います。

～ 汚染米が発生すると ～

基準値を超えた米は、湛水管理の実施を条件として、県が買入・処分を行います。
ただし、同一生産者において、汚染米が連続発生した場合、県の買入価格が減額となります。

- ◎ 2年連続発生 …… 通常買入価格の1／2の価格
- ◎ 3年以上連続発生 …… 通常買入価格の1／3の価格

(例) 通常買入価格が、6,000円/30kgの場合
2年連続発生 …… 3,000円/30kg
3年連続発生 …… 2,000円/30kg

(お問い合わせ先) 秋田県農林水産部水田総合利用課・地域振興局農林部・市町村・JAへ



大豆ほ場への 難防除雑草の侵入に注意

近年、これまでとは異なる種類の雑草（帰化アサガオ類など）が大豆ほ場で問題となる事例が増えています。これらの雑草は、ほ場にまん延すると完全に防除することが難しいため、**初期対応が重要です**。ほ場やその周辺で謎わしい雑草をみかけた場合は、指導機関へ相談するなど、初期対応を徹底してください！

つる性の帰化雑草

- 帰化アサガオ類やアレチウリは、種子で繁殖する一年生つる性雑草。
- 発生量が多いと大豆を覆い尽くして収穫不能になるなど、甚大な被害をもたらす。
- 畦畔から侵入することがあるため、畦畔管理も重要となる。

アレチウリ



形態・特徴

- 高さは5～8mに達する。
- 葉はキュウリやカボチャに似る。
- 花は緑白色で、直径1cm程度、5枚の花弁からなる。
- トゲだらけの果実が塊となって乾実する。
- 水系を過して種子が移動する可能性があるため、河川が浸透した場合等も注意が必要。

特定外来生物に指定されており、生きたまま（種子含む）他の場所へ運ぶことが原則禁止されている。

帰化アサガオ類

本県大豆ほ場では、アメリカアサガオ、マルバルコウ、マメアサガオの3種が確認されている。



大豆に絡みつくアメリカアサガオ

形態・特徴

- 長さは数mに達する。花は赤～黄色と様々で、直径3cm程度の漏斗型、上からみるとほぼ円形である。帰化アサガオ類では県内で最も多くみられる。
- 葉が分裂しないマルバアメリカアサガオは、アメリカアサガオの変種である。



マルバルコウ

形態・特徴

- 長さは3～4mに達する。
- 角があるハート型の葉が特徴。
- 花は朱赤色で、直径1.5～2cm程度の五角形漏斗型である。



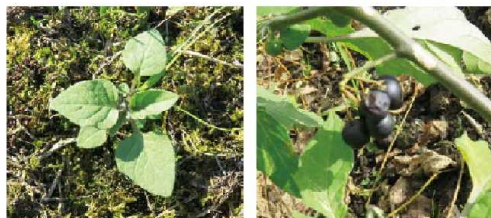
マメアサガオ

形態・特徴

- 長さは数mに達する。葉縁は紫色を帯びることが多い。
- 花は白色、まれにピンク色で、直径1.5cm程度である。

イヌホオズキ

- 種子で繁殖する一年生雑草。果実を含めて全草に毒がある有毒植物である。
- 主な被害は、減収や果実などによる汚損粒の発生である。
- 畦畔から侵入することがあるため、畦畔管理も重要となる。



イヌホオズキの幼植物（左）と果実（右）



形態・特徴

- 基部からよく分枝し、高さは50～90cmに達する。
- 葉は先のとがった卵形で、縁に不揃いの鋸歯（ざざぎざ）がある。
- 花は白色で5裂し、直径1cm程度である。
- 果実は球形で直径7～10mm。未熟果は緑色であり、熟すと黒色になる。

作成：秋田県植物防疫協会 編集：秋田県農林水産部（平成30年2月作成）

マルバルコウの写真（全量）は、秋田県立大学名誉教授 森田弘彦氏 提供

各地域における技術情報等のお知らせ

各地域における技術情報等についての問い合わせは、最寄りの地域振興局農林部農業振興普及課に電話またはFAXをお願いします。

各地域振興局	電話番号	FAX番号
鹿 角 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-23-3683	0186-23-7069
北秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-62-1835	0186-63-0705
山 本 地域振興局農林部農業振興普及課	0185-52-1241	0185-54-8001
秋 田 地域振興局農林部農業振興普及課	018-860-3410	018-860-3363
由 利 地域振興局農林部農業振興普及課	0184-22-8354	0184-22-6974
仙 北 地域振興局農林部農業振興普及課	0187-63-6110	0187-63-6104
平 鹿 地域振興局農林部農業振興普及課	0182-32-1805	0182-33-2352
雄 勝 地域振興局農林部農業振興普及課	0183-73-5114	0183-72-6897

〇SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）LINEで情報発信を行っています

秋田県稲作技術情報 「秋田の米ぢから」



水稻栽培に関する情報をリアルタイムで発信しています。

<主な配信内容>

- ・ 秋田県内の水稻の生育状況
- ・ 水稻および大豆の技術情報
- ・ 異常気象対策
- ・ その他、秋田米に関する情報



こちらのQRコードから
登録できます

記事についてのお問い合わせは

秋田県農業試験場

作物部
生産環境部

TEL 018-881-3330
内線(422・423・424)
内線(306・310)

秋田県病害虫防除所

TEL 018-881-3660

秋田地方气象台

TEL 018-864-3955

東北農政局秋田県拠点

TEL 018-895-7303

秋田県農林水産部水田総合利用課（農産・複合推進チーム）

TEL 018-860-1786

園芸振興課（調整・普及チーム）

TEL 018-860-1801

【次回の発行日は7月18日（金）の予定です】